



SSKS 療育ねっとわーく川崎

2011年4月20日発行
No.139特別号(1000部)
NPO法人
療育ねっとわーく川崎
発行者 江川 文誠
編集者 谷 みどり

NPO法人療育ねっとわーく川崎 東北大震災ボランティアセンターを立ち上げました

NPO法人療育ねっとわーく川崎では、3月11日の震災後、被災地の支援を模索する中で、ひとりではできないことも、療育ねっとわーく川崎のつながりを生かせば、有効な支援ができるのではないかと考え、ボランティアセンターを立ち上げました。

23日、職員の福田を通じて、山田町にある陸中海岸青少年の家に避難している知人と、連絡を取ることができました。

25日、第1陣の支援物資(食料品・下着120枚・灯油・タオル等)を陸中海岸青少年の家に届けました。

31日、陸中海岸青少年の家の担当者と電話で連絡が取れ、支援物資の希望を聞くことができました。

4月5日、第2陣の支援物資(乾麺2500食・缶詰600個・下着類300人分・学用品等)を青少年の家に届けました。青少年の家に避難されているはまなす学園の方とお話してきました。

現地に直接届けることで、被災者が求めている支援が具体的に分かるようになってきました。こちらの思いだけで行動するのではなく、被災者のその時々々の要望を受けとめる支援が必要だと痛感しました。これから、仮設住宅への移動なども考えられる中、必要とされる支援も変わってくることでしょう。物資ではなく、人手が必要になるかもしれません。

私たちは、今までの活動の中でつながった縁(ネットワーク)を大切に、みんなで協力しながら、今後もできる限り持続的な支援をしていこうと思います。

私たちの活動にご賛同いただける方がいらしたら、ご支援をお願いします。

★支援金を寄せていただける方は、ねっとわーくベア基金にお願いします。

ゆうちょ銀行 療育ねっとわーく川崎 口座10280-84335271

連絡先 川崎市多摩区登戸2981 NPO法人療育ねっとわーく川崎 サポートセンター Rond

TEL 930-0160 FAX 930-0128

Eメール tani@rond.jp 担当者 谷

ボランティアセンターの活動については、療育ねっとわーく川崎のホームページをご覧ください。http://rond2981.jimdo.com/

今、必要とされる物資・・・一部の人数だけでなく全員に行き渡る数が必要です。

缶詰・レトルト食品(カレー・おかず類)・レトルトおかゆ
春物衣類・ズボン・ジャージ上下72名分(はまなす学園園生用)

*衣類は、新品またはそれに近いもののみ送ります。
その他、必要な物資もありますが、提供して下さる方は、必ず事前にRondまでご連絡ください。

療育ねっとわーく川崎総会6月30日10時30分〜川崎市民プラザ(梶が谷)
◆今年度より会員登録は次のようになります。
【正会員】議決権がある会員 年会費2000円
【賛助会員】活動に賛同するが、議決権のない会員 年会費1000円以上
【利用会員】サービス利用が目的で、議決権のない会員 年会費2000円
会費の改定については、総会での提案とさせていただきます。

特別号の目次

- NPO法人療育ねっとわーく川崎東北大震災ボランティアセンターを立ち上げました...1
- 心をつなぐ支援...2,3
- 岩手県山田町被災地支援緊急写真展...3



岩手県山田町被災地支援 緊急写真展

「津波に襲われた町

岩手県大槌町、山田町」

撮影 川上靖雅

プリント協力 日本プロセス株式会社 川崎マイスター 流石栄基

場所 川崎市多摩区総合庁舎1階アトリウム内

日時 平成23年4月13日~4月18日

9:00~20:00(開館時間内)



川崎市多摩区総合庁舎
川崎市多摩区登戸1775-1
JR南武線登戸駅から徒歩10分
小田急線向ヶ丘遊園駅北口から徒歩5分



主催:療育ねっとわーく川崎
〒214-0014 川崎市多摩区登戸2981
tel 044-930-0160
URL: http://rond2981.jimdo.com
後援:「映像のまち・かわさき」推進フォーラム

発行所 郵便番号一五七〇〇七三 世田谷区砧六二六二二一
特定非営利活動法人 障害者団体定期刊行物協会 定価一〇〇円

心をつなぐ支援

岩手県山田町の「青少年の家」へ第2陣が出発する前日、数日前から支援物資の依頼と仕分け作業のお願いをしていたところ、想像をはるかに超える支援物資とお手伝いの申し出を頂きました。

「うどんなどの乾麺が欲しい。1回300人分が必要ですよ」という呼びかけをしたところ、2500食分以上が集まりました。文房具や、下着は300人以上、お菓子、本などもたくさん集まりました。

親子で手伝いに来てくれ、被災地の方たち



「メッセージを書いてくれました。誰もがもくもくと、協力しながら自主的に動いていました。言われたからやるのではなく、自分たちの心をこめて、集めて送りたいという暗黙の「心をつなぐ支援」がそこにはありました。

後になって被災地からの要請で水のペットボトルが必要ということ、早速、車で10軒余りのスーパーを回りましたが、買い集めたのは72リットル分くらいでした。

このスーパーも「お一人様2リットルまで」でしたが、2リットル入りのペットボトルはどこにも在庫はなく、開店直後には売切れてしまうようでした。500mlのペットボトルは一人購入できるのはお店によって1本から3本まででした。

「支援物資として送りたいのですが」とお願いしても、どこのスーパーでも「申し訳ございません」が帰ってくるだけでした。「買占めはやめよう」という風潮の中、集めるのも難しいことを改めて実感しました。

支援で大切なことは、刻々と変わる被災地の状況で「今何が必要か」という情報を的確に早く確認すること。「復興」までに長くかかる事を見据えた長期的な支援を続けることです。

今回、縁があつて岩手県山田町の避難場所への救援のお手伝いをさせて頂いていますが、避難場所から自宅へ戻る人、親戚の家に身を寄せる人、これから出来る「仮設住宅」へ移る人。

やがて避難場所はなくなり、それぞれが地域で「復興」のための足がかりを模索し始めるはず。そこから、「復興」の始まりであり、継続的な支援が必要になるはず。政府や自治体の支援が中心になるかもしれませんが、私たちに出来る、私たちにしか出来ない支援をこれからも被災地の方と一緒に進めて行きたいと思えます。

これからも「心をつなぐ支援」にご協力をお願いします。（山崎健一）

「津波に襲われた町 岩手県大槌町、山田町」

突然でした。

目の前に、いままで見たことも聞いたこともない光景が、橋を渡ったとたんいきなり現れました。ニュースで何回も東日本大震災の悲惨な映像を見ていて、覚悟はしていましたが、現実を目の前にすると、どこにいるのかも、何時なのかも、自分は今いったい何を感じているのかさえ解らなくなりました。職業柄、撮影機材は持参していましたが、撮影してどうするんだ？、誰のために撮るんだ？と。カメラを持つとは、思えませんでした。

NPO法人療育ねっとわーく川崎では、3月11日の震災後、どのように被災地を支援して行こうかと、交錯する情報のなか模索していました。そして関係者の森田さんの実家が山田町で被災していることを知り、とりあえず物資の輸送と情報収集の目的で、現地に行くことを決定しました。3月25日、思いつくままに支援物資を集め、スタッフの山崎さん、私（川上）、そして森田さんの三人で出発しました。

ご家族のいる避難所 山田町青少年の家につくと、被災者の方々が暖かく迎えてくれました。その体育館には、300人もの方々が、冬の寒さの中、ところ狭しと布団を並べて不安な日々を過ごしていました。でも、そこにいる人達は、周りを気遣い、助け合って生きていました。最低限の物資は入っていますが、生きて行くのに最低限必要な物資です。生活できるまでには至っていません。こんな状況でも、我先に物資をもらおうとせず、持って行ったガソリンも、私達の帰路のために使って欲しいと気遣っていただきました。

森田さんは、聴覚障がいと耳が聞こえないため、山田町の実家がどうなっているか、電話では状況がよくわからず、是非自分の目で見に行きたいと同行しました。ご家族は、家や車、いままで生きて来た過去も、地震と津波そして火災によって全部なくなりました。近所の方々もたくさん、亡くなられたり行方不明だと。

被災地の中を帰る途中、車を止めてもらい、瓦礫と化した町を自分の足で歩きながら写真を撮りました。

僕自身が一生この惨事を忘れないように。

そして、これから生き残った人達が未来に向かって歩いて行くために。

亡くなられた方々のご冥福と、被災地の一日も早い復興を祈っています。

写真文 川上靖雅
プリント協力 流石栄基
(日本プロセス株式会社 / 川崎マイスター)